

多様な価値をもつ阿蘇の草原

阿蘇の草原は、平安の昔から放牧、採草、野焼きなど地域の人々のなりわいの場であったが、今日ではそこに様々な価値が認められるようになってきている。例えばヒゴタイ、ツクシマツモトといった九州が大陸と陸続きであったことを物語る植物は、今では阿蘇の草原でしか見ることができない。氷河期が終わり、全国で森林化が進むなか、火山周辺など限られた場所だけに草原が残り、有史以降は火入れなど人の営みによってそれが維持されてきたのである。

風景としての草原

東西18km、南北25km、周囲90kmに及び世界最大のカルデラ地形と一体となった広大な草原の景観は、世界に誇る遺産であり、昭和9年の国立公園指定の要件ともなった。

草原景観は阿蘇のイメージとして定着、年間1千万人を超える観光客が訪れており、草原は熊本の観光を支える要因の1つとなっている。



農業からみた草原

阿蘇は日本でも有数の肉用牛生産基地である。阿蘇郡には2,200戸の有畜農家があり、飼養頭数は約42,000頭、このうち約10,000頭が草原に放牧されている。草原は採草・放牧地として畜産を支える基盤となってきた。



文化としての草原

1,000年に及ぶ牧野利用の歴史は、野焼き、盆花採り、干し草刈り、草小積みなどの生業や生活にとって不可欠な営みを草原と結びつけ、地域固有の文化を生み出した。草原は自然と人との共生の文化の象徴であり、身近なふるさとの原風景ともいえる。



国土保全や水源涵養の源としての草原

阿蘇の草原は九州中・北部の6本の一級河川の源流にあたり、約180万人の飲み水に直結している。

草原が荒れると「霜崩れ」という土砂流出が起こったり、火災の危険性が高くなる。



生物多様性保全の場としての草原

阿蘇の草原にはここにしか生息していない植物をはじめ、豊富な草原性植物やハナシノブなどの日本の北方から南下してきた植物、ヒゴタイ、ツクシマツモトといった九州が大陸と陸続きであったことを物語る植物などが存在しており、草原特有の野鳥や昆虫等の動物も生息する生態系を形づくっている。



ツクシマツモト